

霞ヶ浦には実に幼稚な漁法しかなかったらしいんです。張り網とか、さし網、すくい網ぐらゐのものはあったらしいんですが、地引網とか大謀網なんという大規模なものはなかった。そこで私の祖先は、何とかこの霞ヶ浦に豊富にある魚をうまく取る方法を考え出したと思います。この良平時代は、折本家は、「あい屋」といって染物業だったんです。霞ヶ浦よりちょっと入った佐賀村という小さな部落の一角で染物業をやっていたんですね。屋敷は三反歩位。そのうち一反歩位は竹山があり、屋敷の中央に三畝位の池があったんです。この池は染めた反物の洗い出しをするのに必要だったんですね。この池を利用して、船の模型を作っては、この池に浮べて、あれやこれやと研究したららしいんです。染物業のかたわら、この工夫を始めたのは明治の始めて、高瀬船という当時霞ヶ浦を走っていた船の帆を研究したり、たごのつり方を詳しく調べて、それをヒントに、帆曳網の滑り方を工夫したらしいんですね。あの帆というのはつり糸のつり方で、うまく上りもするし、全々上がらないのもある。つり方ひとつで実にいろいろな飛び方をします。このつりのあやつり方を利用して、帆を帆にたとえれば網がつりという具合でして、風と水の力をうまく利用

して、帆曳船を作ったというわけですね。佐賀(善)折本良平さんの偉いのは、それだけでなくて船を横に走らせたということだよ。誰だって船は軸を先にして走るもんだと思ってる。それを帆を上げたら船体を進行方向と直角にして走るなんてことを考えてそれで魚を獲る工夫をしたんだから全く偉いと思うよ。日本国中、船を横に進ませて魚をとったなんて漁法はどこにもあるまい。

折本 そうだねえ。しかしこの方法を考え出して実際に魚を取れるようになるまでに十五年から二十年かかったそうですよ。そして、この方法ならやれるという事になってから、漁民に転換したわけですね。それから周りの住民の代表を集めて、新しい漁法の指導をしたんですね。それからあと、霞ヶ浦の漁業は急速に発達して、漁業協同組合も出来たわけですね。そして明治の末年、折本良平の功績を讃えて、歩み崎に記念碑を建てたわけですね。今でも建てています。

帆曳網發明家折本良平翁記念碑

明治四十五年一月建立

霞浦沿岸帆引網漁業者他有志建立

こんなわけで、帆曳網の発祥の地は出島村なんです。これがどんどん沿岸の村々に広がって、西浦ばかりで